

仏像彫刻師 山田國行



個人的には、観音さんなど
やさしい表情の仏像が
好きですわ。

1,500体以上もの古仏を
制作された年代や彫り方に忠実に
修復、修理を行っています。

仏像彫刻師
山田國行さん



仏像制作を行う父をそばで見ながら、仏師に必要な技を身に付けました。仏師になった当初は、木材を彫ったり削ったり新しい仏像を制作していましたが、今は寺や古美術商からの依頼で、経年によって破損したり汚れてしまった古仏の修復、修理を専門にしています。仏師になって50年、これまで1,500の体以上の修復、修理を手がけています。

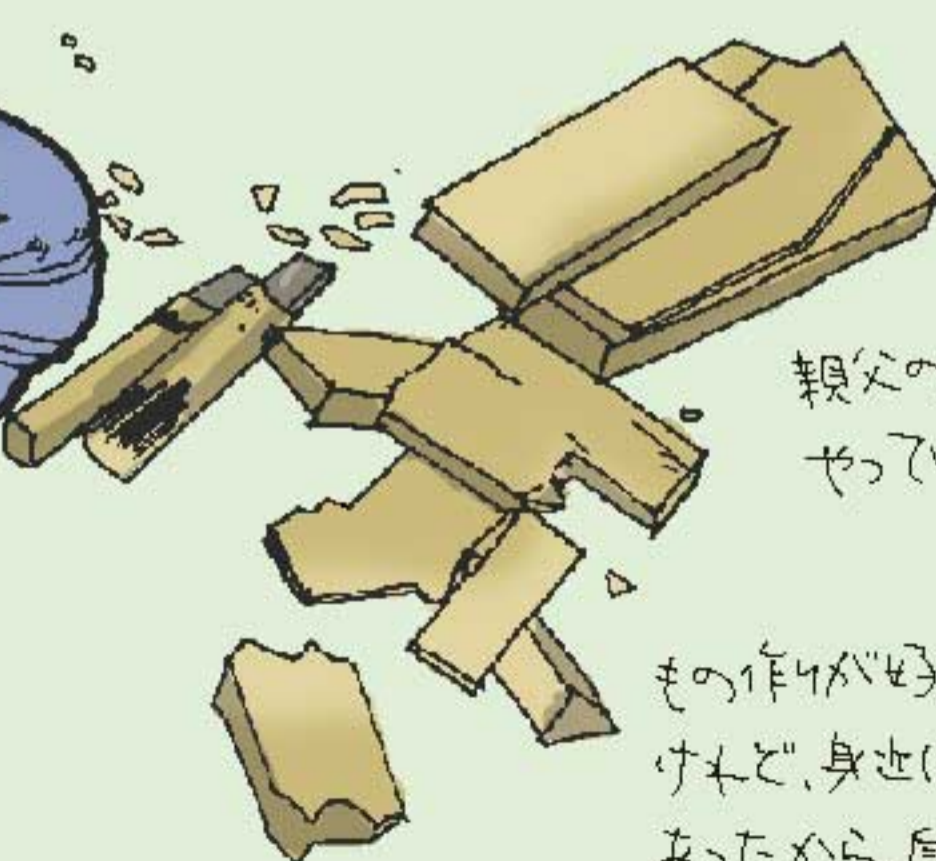
木を彫りすすめる仏の形にしていくのももちろん、高い技術が求められる仕事です。それに比べ、修復・修理で大切なことは自分の感情を入れないこと。「この仏像を作った作者なら、こういうふうにするだろう」とイメージすることが必要です。同じ年代の仏像資料があれば文献を参照することで、より具体的なイメージを描けます。もともとの作り方に忠実であることが、修復、修理においては欠かせません。

たとえば江戸時代など、何百年も前に制作された仏像と同じ木材を用意できないことも。茶色く変色していることも多く、今ある木材を使って補い、補色することで違和感のないように仕上げます。忠実に仏像を修復していくには、私自身の心の安らぎが絶対条件です。

基本、ご依頼いただいた仕事を断ることはしません。ただ、1体1体に時間がかかるので、来年ぐらいまで予定が詰まっています。それでも、今の楽しみは個人的に収集している約7の体もの古仏の修復です。仕事と趣味が同じや、と言われることもありますが、仏像に触るのが好きなんですわ。何より、仏様を鼻がかけても元の形を創造するのは、私の使命のなんだと思います。



江戸時代の仏像であれば、江戸時代の仏像に関する文献を参考にし、その時代の特徴をつかむようにしています。それ以上に、修理を待つ仏像そのものが教えてくれるんですわ。



師匠である親父から教えてもらった
ことはありません。

親父の背中を見ながら覚える、手を動かしながら
やっていくしかないんです。

もの作りが大好きで、仏像でなくてもよかったです。けど、身世に仏像制作という仕事があったから、自然な流れでこの世界に入りました。

古色など卓越した技術力で 全国から修理、修復の依頼が来る

奈良県にある東大寺南大門の金剛力士像は、奈良の仏師“奈良仏師”によって制作されたもの。山田さんのお父様は、その奈良仏師の系譜に連なり、多くの仏像制作に携わった。お父様の技を受け継ぎ、二代目の仏師として技で勝負する山田さん。当初は新しい仏像を制作していたが、現在、山田さんの専門は破損したり変色した古い仏像を修復、修理すること。「つながりのある古美術商から、仏像の修理に対応できないか」と依頼されたのがきっかけだった。

修理修復の手順は、まず汚れや古い染料を洗い落とし木地の状態にし、破損している部分は必要な長さに切った木材を接着し、彫刻刀で削って形づくり、磨き、その上から色を塗って仕上げる。新品同様に仕上げしてほしいのか、古い感じのままにしてほしいのか、依頼主の要望に応じて表現する。

修復、修理といっても同じことの繰り返しではなく、一つひとつすべて違う。文化財に指定されている仏像や何百年も前の古い仏像など、歴史的価値の高いものを扱うこともある。制作された年代によって仏像の持つ雰囲気や表情は異なり、さらには彫り方や使用されている木材など考慮しなければならないことは多い。

制作前に簡単な図面は描くけれど、首、手、足など要所となる位置だけ決めればあとは感覚に任せて彫っていく。指1本の修復であれば1週間もあればできるが、複雑なものであれば2年かかることも。それでも、山田さんをお願いしたいという依頼は絶えない。仏像に真摯に向き合い、その仏像の持つ雰囲気を古色の技術で表現。その崇高な技が、山田さんの持ち味と言える。

仏像彫刻師 山田國行

〒544-0003 大阪市生野区小路東5-14-12

TEL / 06-6757-3319

事業内容 / 仏像制作、古仏の修復、修理

仏像に使用されているのは、1000年前のものはクスノキが多く、最近のものはヒノキが主流など。ヒノキはやわらかく素直だけれど、クスノキはクセが悪く、1年置いてからでもひねたりするそう。

奈良から東京、九州まで、依頼先は全国に広がる。

文化財の修復や
2mを超える
大きな仏像の制作も!



この技術を誰かに継承して、とまわすのが、彫るのと人に伝えるのが、一番難しいことだ。

依頼者に修復した仏像を納めた時、笑って喜んでくれたら、この仕事はやりがいがある。

鼻の形を創出し、その仏像の持つ表情を再現する。

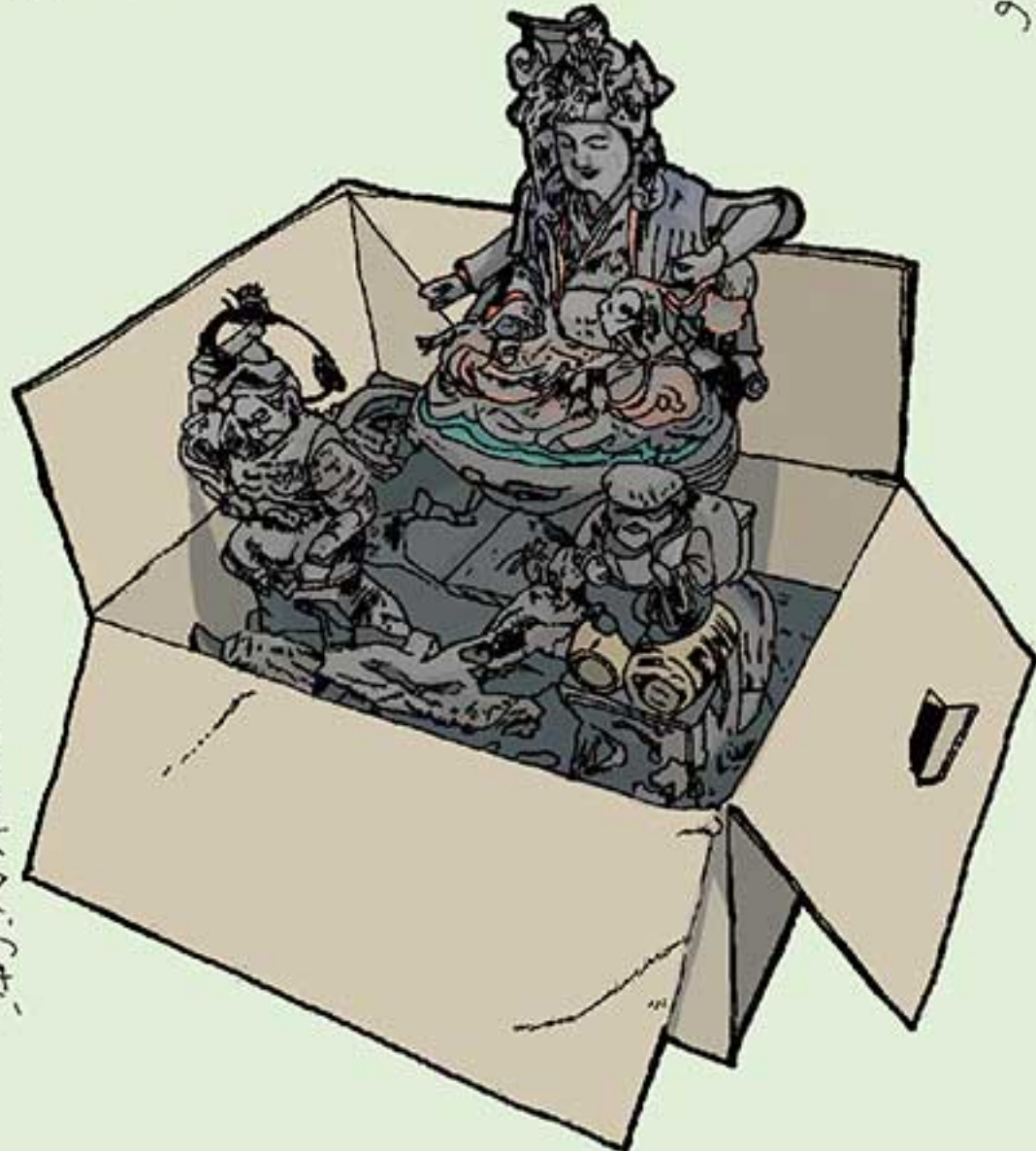
鼻の高さや形、目の形など顔を作るのとはとても難しい。手や足も指の形や太さによって印象が大きく変わるので、繊細な作業が必要になる。

木製の仏像の修復には、専用の道具が必要で、その道具は自分で作っています。

彫刻刀だけで400種類以上、使い分けています。道具も自分で作っています。



木の柄に刃を差し込んで研ぐうちに刃が縮んでくれば引き出し、また研いで引き出し...という具合。刃に刻まれた刻印が見えてきたら、その刃は使い終わりというサインです。



完成したあと、国産のニスで仕上げ、あとから見直さずです。そして、仏像の持つ雰囲気や表情を再現する。